



# ILCAA

2013

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa



## 目次

---

|        |   |
|--------|---|
| 所長あいさつ | 2 |
|--------|---|

### 概要

|            |   |
|------------|---|
| AA研の研究活動   | 4 |
| 研究・運営体制    | 5 |
| 研究組織構成     | 7 |
| 研究連携ネットワーク | 8 |
| 研究スタッフ     | 9 |

### 共同研究

|             |    |
|-------------|----|
| 基幹研究        | 12 |
| 共同利用・共同研究課題 | 13 |
| ネットワークの構築   | 20 |
| 大型プロジェクト    | 21 |
| 既形成拠点       | 22 |

### 研究資源

|                       |    |
|-----------------------|----|
| アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源 | 24 |
| 出版物                   | 24 |
| 海外研究拠点                | 25 |
| 音声学実験室                | 26 |
| 文献資料コレクション            | 26 |

### 研究者養成

|                 |    |
|-----------------|----|
| 研究者養成のための事業     | 28 |
| 言語研修            | 29 |
| フィールド言語学ワークショップ | 30 |
| 中東・イスラーム関連セミナー  | 31 |
| アクセスマップ         | 32 |

付録: 関連資料



アジア・アフリカ言語文化研究所長  
三尾 裕子

## 所長あいさつ

つなぐ・つなげる

### 他者から学ぶことの豊穡

本研究所は、アジア・アフリカという豊かな自然・人文環境を有する多様性ととんだ地域を言語学、人類学、歴史学的な側面から研究する研究所です。また、アジア・アフリカの諸地域の地域研究を行うことで、広く人類の言語・文化・歴史における普遍性や多様性を解明することを目指しています。グローバリゼーションが進行しつつある今日、地球上の諸社会の言語や文化は、急速な西洋化、あるいは均質化の方向に突き進んでいるといわれています。しかし、他方、アジア・アフリカ地域の諸社会は、長い固有の伝統や広い地域にまたがる交流の歴史を基盤として、それぞれに、個性豊かな文化を生み育ててきています。それら諸地域は、昨今のグローバリゼーションを受け入れる懐の深さと、それを包み込みつつさらに個性を輝かせる強靱さを持っています。そして、こうしたアジア・アフリカ諸地域の文化は、私たちが日常当たり前と思っていることが決して当たり前のものではないこと、暮らし方やものの考え方、風習やしきたりには、多様な選択肢があることを気づかせてくれます。こうした気づきをもたらしてくれることこそが、この領域の研究を行う研究者の最大の喜びの源であり、私たち人類にもたらされる最大の恵みといえましょう。とはいえ、アジア・アフリカの諸地域の中には、近年目覚ましい発展を遂げ、政治的・経済的に発言力を増大させている国や地域が増えている一方で、他方で紛争に見舞われたり、貧困から脱却できずにいる地域もあります。グローバリゼーションの進行しつつある今日であればこそ、このアジア・アフリカの動向は、日本のみならず地球社会の今に瞬時に大きな影響力を及ぼすことになると同時に、人類の未来を大きく左右することになりましょう。本研究所は、21世紀の穏やかで豊かな地球の見取り図を描いていくために、このような重要性をもつアジア・アフリカに関するより新しい認識の枠組みを提供する研究成果を生み出していくことを目指しています。

本研究所は、全国共同利用研究所として1964(昭和39)年に設置されましたが、2010年度からはそれまでの成果を継承・発展させるべく、「共同利用・共同研究拠点」制度の下で、より一層国内外に開かれた「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として新たなスタートを切りました。広かつ多様で、奥の深いアジア・アフリカを研究するためには、本研究所のスタッフだけでカバーしきれものではありません。共同利用・共同研究拠点としての本研究所は、研究所の枠、さらには本研究所が附置されている国立大学法人東京外国語大学の枠を越えて、国内外の広範な研究者の参加を得て、共同研究を展開しています。それと同時に、研究所内部でも、重視する研究領域を明確にするために、2010年度から四つの基幹研究—「言語ダイナミクス科学研究」、「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」、「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」、「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探究」—を展開しています。今後は、これら2種類の研究活動を基軸として、より深化した研究の成果を生み出していくことが必要です。今後とも、本研究所は国内外の研究者コミュニティとの連携強化・拡大を進め、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」の名にふさわしい活動をする所存です。皆様のより一層のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

エチオピア、アムハラ州ダンカズ：エチオピア高原の眺望 撮影：石川博樹



人と人をつなぎ  
新たな認識をひろく

## 概要



## AA研の研究活動

アジア・アフリカ言語文化研究所(以下、AA研)は、文部科学大臣によって言語学・文化人類学・地域研究分野の共同利用・共同研究拠点に認定された「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」です。共同利用・共同研究拠点の認定制度は、国公立大学を通じて研究者が共同で研究を行う体制を整え、わが国全体の学術研究をさらに発展させる目的で、2008(平成20)年に文部科学省が創設したもので、大学に附置された研究施設のうち「全国の関連研究者に利用させることにより、わが国の学術研究の発展に特に資する」と認められたものだけが共同利用・共同研究拠点に認定されました。

共同利用・共同研究拠点としての本研究の使命は、今日、人類の7割を超える人びとが暮らすアジア・アフリカ地域の多様な言語・文化のあり方を研究し、中長期的には、21世紀の地球の見取り図を描くうえで必要不可欠な、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識の枠組みを提供するための基盤形成に寄与すること、また、この地域の多様な言語・文化のあり方をモデルに、未来の多元的世界の発展可能性を追求することにあります。

この目的を達するため、本研究所では主に以下の3つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進しています。

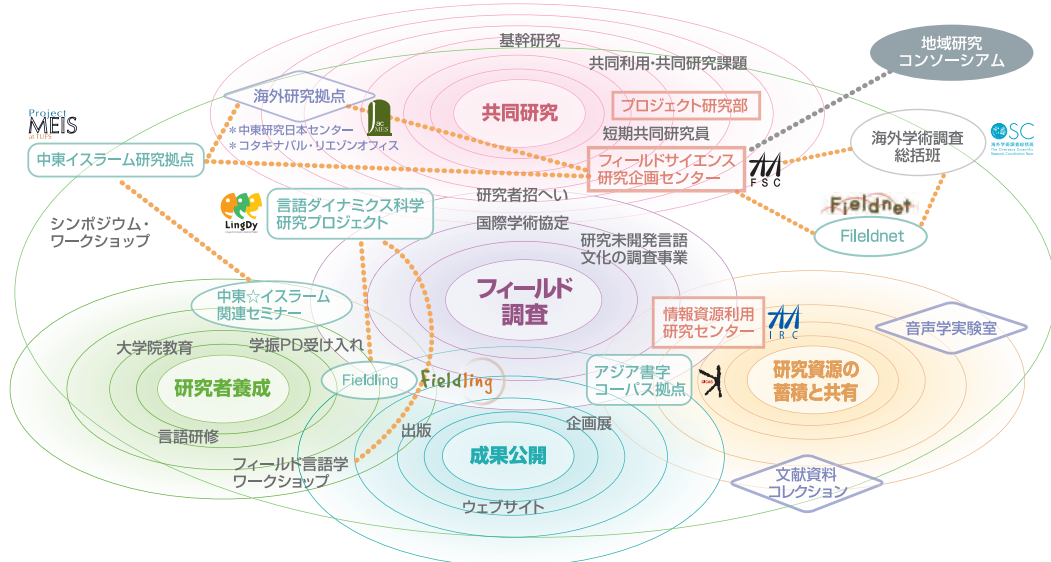
- 1) 臨地研究(フィールドサイエンス)に基づく国際的研究拠点としての共同利用・共同研究
- 2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源の収集・分析・編纂および研究成果の発信
- 3) 研究活動および研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

## 代研究者養成

このうち、特に1)と3)の推進にあたっては、本研究所が設置・運営している2つの海外拠点も有効に活用し、国境を越えた現地共同研究や、国外の関連研究者の参加を得る形での次世代研究者養成を実現しています。

2013(平成25)年度には、新たに6つの共同利用・共同研究課題が発足する一方、第一期3年間の共同研究で大きな成果を挙げた2つの共同利用・共同研究課題が第二期の活動に取り組み始めました。これらの研究課題は、AA研所員が、国内外で最先端の研究を行っている300名を超える研究者と緊密に連絡を取りながら展開しています。すべての研究課題は公募のうえ、所外の研究者が過半数を占める委員会による厳格な審査を経て採択されたものです。

一方、本研究の場合、研究対象となる地域と学問分野が非常に広く、所員の専門も多岐にわたることから、とすれば共同利用・共同研究拠点としての特徴がわかりにくくなってしまいうという問題を抱えていました。そこで、2010(平成22)年度からは、「言語ダイナミクス科学研究」「人類学におけるマイクロマクロ系の連関」「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探究」の4つを研究所の基幹研究に選び、拠点としての特徴を外側に対してより具体的に示すようにしています。4つの基幹研究は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究費や特別教育研究経費(拠点形成)を得てすでに研究所内に形成されている「アジア書字コーパス拠点」「中東イスラーム研究拠点」と並ぶAA研の顔として、公募による共同利用・共同研究課題と連携しつつ、強力かつ集中的な共同研究を進めています。





### 研究・運営体制

共同利用・共同研究拠点である本研究所には、研究者コミュニティの意向をいっそう明確に拠点運営に反映し機能を適切に遂行するために、外部の研究者を含む以下の委員会が置かれています。

2013(平成25)年度の各委員会の概要と、それぞれの委員は次のとおりです。

#### 運営委員会

運営委員会は、過半数を占める外部委員(AA研の共同研究の主要分野の研究者等)とAA研内部から選出された委員とで組織されます。運営委員会は、AA研の共同利用・共同研究の重要事項および研究活動全般に関する協議を行います。

岩下 明裕(北海道大学スラブ研究センター教授)  
 栗林 均(東北大学東北アジア研究センター教授)  
 小林 正人(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)  
 佐藤 洋一郎(総合地球環境学研究所副所長/教授)  
 瀬川 昌久(東北大学東北アジア研究センター教授)  
 竹中 英俊(東京大学出版会編集局長)  
 富永 智津子(宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所客員研究員)  
 西尾 哲夫(国立民族学博物館教授)  
 渡邊 興亜(総合研究大学院大学名誉教授)  
 三尾 裕子(AA研所長)  
 飯塚 正人(AA研副所長)  
 中山 俊秀(AA研情報資源利用研究センター長)  
 真島 一郎(AA研フィールドサイエンス研究企画センター長)  
 クリスチャン・ダニエルス(AA研)  
 西井 涼子(AA研)  
 稗田 乃(AA研)

#### 共同研究専門委員会

共同研究専門委員会は、過半数を占める外部委員(AA研の共同研究の主要分野の研究者等)とAA研内部から選出された委員とで組織されます。AA研が公募する共同研究課題の審査および実施中の共同研究課題の評価を行います。

北川 勝彦(関西大学経済学部教授)  
 倉沢 愛子(慶應義塾大学名誉教授)  
 栗本 英世(大阪大学大学院人間科学研究科教授)  
 林 徹(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

速水 洋子(京都大学東南アジア研究所教授)  
 水島 司(東京大学大学院人文社会系研究科教授)  
 横山 伊徳(東京大学史料編纂所教授)  
 米田 信子(大阪大学大学院言語文化研究科教授)  
 三尾 裕子(AA研所長)  
 飯塚 正人(AA研副所長)  
 中山 俊秀(AA研情報資源利用研究センター長)  
 真島 一郎(AA研フィールドサイエンス研究企画センター長)  
 クリスチャン・ダニエルス(AA研)  
 西井 涼子(AA研)  
 稗田 乃(AA研)

#### 研修専門委員会

研究所が主催する言語研修およびその他の研修事業に関する専門的事項について、所長の諮問に応じます。

岸田 文隆(大阪大学大学院言語文化研究科教授)  
 林 徹(東京大学大学院人文社会系研究科教授)  
 南田 みどり(大阪大学名誉教授)  
 吉田 和彦(京都大学大学院文学研究科教授)  
 芝野 耕司(AA研)  
 中見 立夫(AA研)  
 峰岸 真琴(AA研)  
 呉人 徳司(AA研)  
 澤田 英夫(AA研)  
 椎野 若菜(AA研)  
 塩原 朝子(AA研)

#### 海外調査専門委員会

本研究所が行う海外学術調査総括班事業および海外学術調査に関する専門的事項について、所長の諮問に応じます。

伊藤 元己(東京大学大学院総合文化研究科教授)  
 梅崎 昌裕(東京大学大学院医学系研究科准教授)  
 岡本 正明(京都大学東南アジア研究所准教授)  
 木村 秀雄(東京大学大学院総合文化研究科教授)  
 窪田 順平(総合地球環境学研究所研究部研究推進戦略センター教授)  
 曾我 亨(弘前大学人文学部教授)  
 高樋 さち子(秋田大学教育文化学部准教授)  
 蓮井 和久(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科講師)  
 藤田 耕史(名古屋大学環境学研究科准教授)  
 本山 秀明(国立極地研究所教授)  
 高島 淳(AA研)

西井 涼子(AA研)  
 深澤 秀夫(AA研)  
 真島 一郎(AA研)  
 荒川 慎太郎(AA研)  
 伊藤 智ゆき(AA研)  
 太田 信宏(AA研)  
 近藤 信彰(AA研)  
 菊谷 康太(AA研)

#### 編集専門委員会

研究所の出版・広報の方針の設定及び出版物の審査などに関して所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

石川 登(京都大学東南アジア研究所教授)  
 岩田 礼(金沢大学大学院人間社会環境研究科教授)  
 濱田 正美(龍谷大学教授)  
 森口 恒一(静岡大学人文学部教授)  
 吉澤 誠一郎(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)  
 和崎 春日(中部大学国際関係学部教授)  
 深澤 秀夫(AA研)  
 伊藤 智ゆき(AA研)  
 呉人 徳司(AA研)  
 近藤 信彰(AA研)  
 陶安 あんど(AA研)  
 床呂 郁哉(AA研)

#### 国際諮問委員会

国際的な視点から共同利用・共同研究に関し、所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

ANYANWU, Rose-Juliet (Professor, Goethe University, Frankfurt/Main)  
 BERGE, Anna Mary Sophia (Associate Professor, University of Alaska Fairbanks)  
 FATHURAHMAN, Oman (Deputy Director, Center for the Study of Islam and Society, Syarif Hidayatullah State Islamic University)  
 KNOT, Stefan (Associate Researcher, Orient-Institut Beirut)  
 PANGILINAN, Michael Raymon Manaloto (Researcher, Archivist & Lecturer, the Film Academy of Pampanga)  
 PAROLIN, Gianluca Paolo (Assistant Professor, the American University in Cairo)

SEFATGOL, Mansur (Professor, University of Tehran)  
 THUFAIL, Fadjar Ibnu (Senior Researcher, Indonesian Institute of Sciences)  
 WIRYAMARTANA, Ignatius Kuntara (Researcher, Center for Indonesian Language, Culture and Literature Study of Sanata Dharma University)  
 施 謝捷(復旦大学教授)  
 伊藤 智ゆき(AA研)  
 河合 香吏(AA研)  
 近藤 信彰(AA研)  
 渡辺 己(AA研)

#### 海外拠点専門委員会

本研究所の海外拠点における共同利用・共同研究に関して所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

内堀 基光(放送大学教養学部教授)  
 奥田 敦(慶應義塾大学総合政策学部教授)  
 酒井 啓子(千葉大学法経学部教授)  
 私市 正年(上智大学アジア文化研究所教授)  
 長沢 栄治(東京大学東洋文化研究所教授)  
 保坂 修司(財団法人日本エネルギー経済研究所研究理事／中東研究センター副センター長)  
 黒木 英充(AA研)  
 塩原 朝子(AA研)  
 床呂 郁哉(AA研)

#### 中東研究日本センター諮問委員会

レバノン共和国ベイルート市に設置された中東研究日本センター(JaCMES)の活動に関わる事項について、所長の諮問に応じます。

ABU-HUSAYN, Abdul-Rahim (Professor, Faculty of Arts and Sciences, American University of Beirut)  
 AZAR, Pierre (Director, Japan Academic Center, Université Saint-Joseph de Beyrouth)  
 DAHER, Massoud (Professor, Faculty of Literature and Human Sciences, Lebanese University)  
 黒木 英充(AA研)

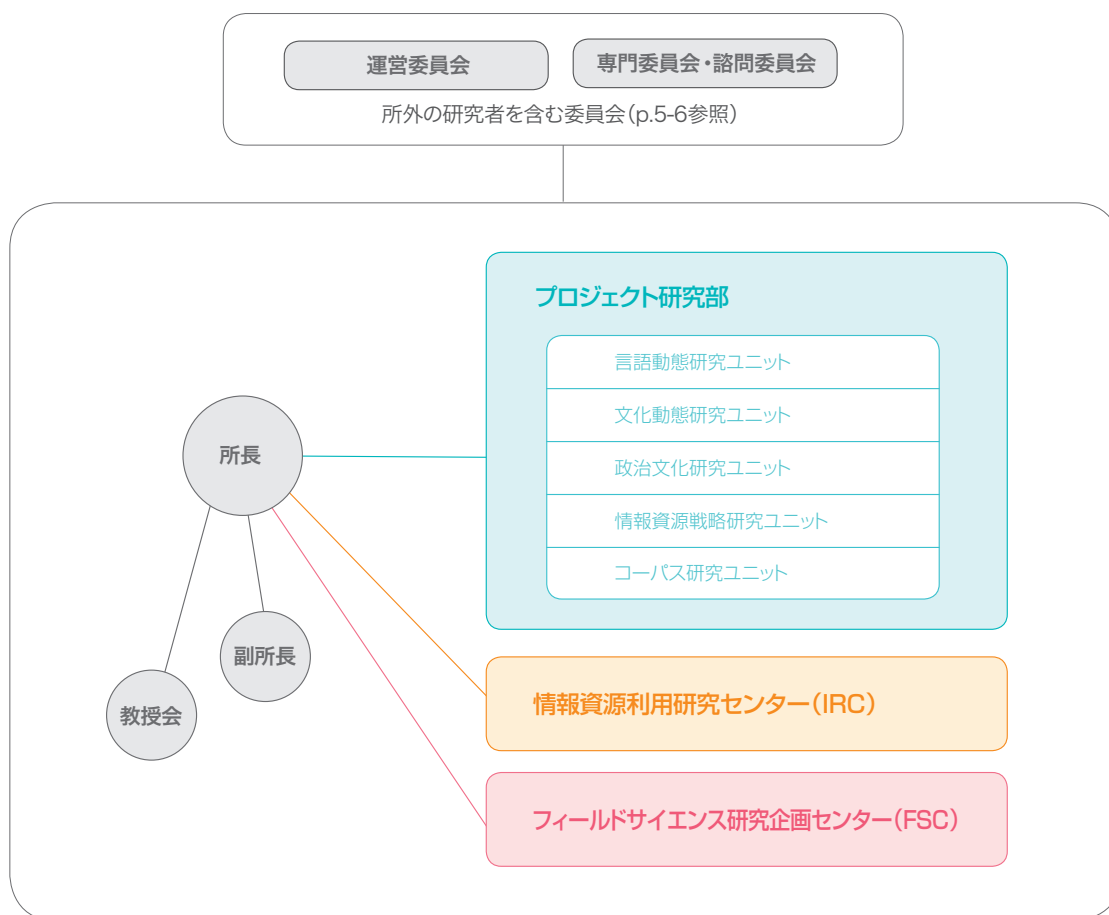




### 研究組織構成

本研究所は5つの研究ユニット(言語動態、文化動態、政治文化、情報資源戦略、コーパス)から成る1プロジェクト研究部および2つのセンター(情報資源利用研究、フィールドサイエンス研究企画)という組織体制をとっています。所員はいずれかのユニットまたはセンターに所属していま

す。そして、個々の専門研究領域に関わる探究を深めながら、基幹研究、共同利用・共同研究課題などにも参画し、国内外の研究者との密接な協力に基づいて、共同利用・共同研究拠点にふさわしい活動を推進しています。



#### 情報資源利用研究センター (IRC)

アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学術交流を推進するAA研の附置センターです。例えば、さまざまな資料のデジタル化やデータベース化の支援や公開、またその方法論の開発を行っています。

<http://irc.aa.tufs.ac.jp/>

#### フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)

AA研の研究活動の特徴づけてきた臨地調査の手法をより実践的・理論的に洗練して、さまざまな学問の領域を横断する「フィールドサイエンス」という「現地学」を構築するとともに、臨地調査に関わる研究者間の連携を担うことを目的としています。また、2つの海外研究拠点を維持・運営しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/>



### 研究連携ネットワーク

本研究所は、広くアジア・アフリカの言語学・歴史学・人類学・地域研究の研究を行う研究者・次世代研究者のネットワークの中核になっています。

組織や国の垣根を越えた共同研究を進めるとともに、より広い視野でネットワークを形成・維持するため、主に次のような活動に取り組んでいます。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/about/network/>

#### 共同利用・共同研究課題

共同利用・共同研究課題は、従来の共同研究プロジェクトを発展的に継承し、所内外の研究代表者のリーダーシップのもとに、所員と所外の研究者が共同で行う研究プロジェクトです。今年度実施される研究課題については、p.13以降をご参照下さい。

#### 海外学術調査総括班

「海外学術調査総括班」は、1975(昭和50)年以来、AA研に事務局をおき、科学研究費補助金(海外学術調査)に関わる研究者間、および研究者側と文部科学省/日本学術振興会との間の情報交換や連絡調整などに当たってきました。海外学術調査を行う研究者間の情報交換を目的としてAA研が取り組んでいる研究連携事業のひとつです。

#### 学術交流協定

海外の研究機関と協定を結び、研究資料・情報の交換、研究者の相互交流、共同研究・調査等の国際的学術交流を推進しています。

#### 友の会

これまでにAA研に所属した研究者との関係を維持し、国際的なネットワークを形成することを目的として「友の会」を設置しています。

#### 地域研究コンソーシアム(JCAS)

「地域研究コンソーシアム」は、地域研究に関わる全国の組織のネットワーク形成を目指している、アカデミック・コミュニティに立脚した新しい型の組織連携です。AA研は、本コンソーシアムの幹事組織としてその運営に積極的に参画しています。

<http://www.jcas.jp/>



## 研究スタッフ

### 【専任教員】

本研究所に専任で所属し個々の研究を行うほか、アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同利用・共同研究拠点の機能を十分に発揮するために共同研究等を組織することによって、研究者コミュニティへの情報提供を行うとともに、国内外の研究者をつなげる役を果たします。

### 言語動態研究ユニット

|      |                         |                              |
|------|-------------------------|------------------------------|
| 教授   | ※稗田 乃                   | アフリカ言語学                      |
| 准教授  | 呉人 徳司                   | 言語学、チュクチ語                    |
| 客員教授 | ANYANWU, Rose-Juliet    | 言語学<br>(2013.1.4～2013.7.31)  |
| 客員教授 | BERGE, Anna Mary Sophia | 言語学<br>(2013.1.15～2013.7.31) |

### 文化動態研究ユニット

|      |                      |                              |
|------|----------------------|------------------------------|
| 教授   | ※三尾 裕子               | 東アジアの人類学                     |
| 准教授  | 椎野 若菜                | 社会人類学、東アフリカ民族誌               |
| 客員教授 | THUFAIL, Fadjar Ibnu | 人類学<br>(2013.11.1～2014.2.28) |

### 政治文化研究ユニット

|     |               |                |
|-----|---------------|----------------|
| 教授  | ※クリスチャン・ダニエルス | 中国西南部：タイ文化圏の歴史 |
| 教授  | 栗原 浩英         | ベトナム現代史        |
| 准教授 | 石川 博樹         | アフリカの歴史        |

### 情報資源戦略研究ユニット

|      |        |                                |
|------|--------|--------------------------------|
| 教授   | ※町田 和彦 | 南アジアの言語学                       |
| 教授   | 中見 立夫  | 東アジア・内陸アジアの国際関係史               |
| 准教授  | 陶安 あんど | 中国法制史と法社会学                     |
| 客員教授 | 施 謝捷   | 中国古文字学<br>(2013.9.1～2014.3.31) |

### コーパス研究ユニット

|      |                                |                                  |
|------|--------------------------------|----------------------------------|
| 教授   | ※芝野 耕司                         | マルチメディア・データベース、多言語処理論、CALL       |
| 教授   | 峰岸 真琴                          | 東南アジア、南アジアの言語学および言語類型論           |
| 教授   | 宮崎 恒二                          | オーストロネシア社会                       |
| 客員教授 | FATHURAHMAN, Oman              | イスラム文献学<br>(2012.9.21～2013.7.31) |
| 客員教授 | WIRYAMARTANA, Ignatius Kuntara | 文献学<br>(2013.9.1～2014.7.31)      |

### 【外国人研究員】

本研究所では、共同研究やさまざまな研究活動を通じた交流と学術研究の推進を図るため、例年4～6名の研究員を、公募を経て、数ヶ月～1年未満の期間で外国から招へいしています。

### 情報資源利用研究センター

|       |                         |                               |
|-------|-------------------------|-------------------------------|
| 教授    | ※中山 俊秀                  | ワカシュ諸言語(北米北西海岸)、言語類型論、言語人類学   |
| 教授    | 飯塚 正人                   | イスラーム学・中東地域研究                 |
| 教授    | 小田 淳一                   | 計量文献学                         |
| 准教授   | 河合 香史                   | 人類学、東アフリカ牧畜民研究                |
| 准教授   | 澤田 英夫                   | ビルマ系少数言語の記述、東南アジア大陸部インド系文字の体系 |
| 准教授   | 高松 洋一                   | オスマン朝史、古文書学、アーカイブズ学           |
| 准教授   | 星 泉                     | チベット文化圏の言語学                   |
| 准教授   | 渡辺 己                    | セイリッシュ語                       |
| 助教    | 錦田 愛子                   | 中東地域研究                        |
| 客員准教授 | PAROLIN, Gianluca Paolo | 法学<br>(2013.5.1～2013.8.31)    |

### フィールドサイエンス研究企画センター

|       |                                     |                                  |
|-------|-------------------------------------|----------------------------------|
| 教授    | ※真島 一郎                              | 西アフリカの人類学                        |
| 教授    | 黒木 英充                               | 中東地域研究・東アラブ近代史                   |
| 教授    | 高島 淳                                | 宗教学・インド宗教史(ヒンドゥー教)、言語情報処理        |
| 教授    | 西井 涼子                               | 東南アジア大陸部の人類学                     |
| 教授    | 深澤 秀夫                               | マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究    |
| 准教授   | 荒川 慎太郎                              | 西夏語学、西夏語文献学                      |
| 准教授   | 伊藤 智ゆき                              | 音韻論、中期朝鮮語、中国語中古音                 |
| 准教授   | 太田 信宏                               | インドの歴史                           |
| 准教授   | 近藤 信彰                               | イラン近代史                           |
| 准教授   | 塩原 朝子                               | 言語学、インドネシア諸言語の記述研究               |
| 准教授   | 床呂 郁哉                               | 東南アジア島嶼部の人類学                     |
| 助教    | 荻谷 康太                               | 西アフリカ・イスラーム地域研究                  |
| 客員教授  | KNOST, Stefan                       | イスラーム研究<br>(2013.10.1～2014.7.31) |
| 客員教授  | SEFATGOL, Mansur                    | イラン歴史学<br>(2012.9.1～2013.7.31)   |
| 客員准教授 | PANGILINAN, Michael Raymon Manaloto | アーカイブズ学<br>(2013.9.1～2014.7.31)  |

※はユニット長およびセンター長を表す

## 【特任研究員・研究機関研究員】

本研究所の専攻分野について高度な研究能力を持ち、将来、学界での活躍が期待される若手研究者を、一定期間にわたり本研究所で雇用しています。

|         |        |                                   |
|---------|--------|-----------------------------------|
| 特任研究員   | 梅川 通久  | 地域情報学、地理情報分析                      |
| 特任研究員   | 小副川 琢  | 政治学(特に国際関係論、比較政治学)、中東地域研究(特にレバノン) |
| 特任研究員   | 小田 昌教  | 文化人類学、現代美術、メディア・アクティビズム研究         |
| 特任研究員   | 松田 訓典  | インド大乘仏教                           |
| 研究機関研究員 | 大島 一   | ハンガリー語学、社会言語学                     |
| 研究機関研究員 | 古谷 伸子  | 文化人類学、タイ研究                        |
| 研究機関研究員 | 福島 康博  | イスラーム金融論、マレーシア研究                  |
| 研究機関研究員 | 藤波 伸嘉  | 近代オスマン史                           |
| 研究機関研究員 | 村尾 るみこ | アフリカ地域研究、生態人類学                    |

ミャンマー、カチン州ミッチーナー：スッ・マナウ(富の踊り)の行列を導くリーダー 撮影：澤田英夫



人と人をつなぎ  
知と知をつなぐ場

## 共同研究



**基幹研究**

共同利用・共同研究拠点である本研究所の中期的研究戦略の柱として、研究所内で自発的に組織された研究班によって展開される共同研究軸です。2010(平成22)年度から3年の計画で以下の課題が基幹研究として採択され、外部評価委員による活動評価と厳格な審査を経て、本年度からさらに3年の研究継続が認められました。

**【言語ダイナミクス科学研究】**

代表者: 中山 俊秀

AA研基幹研究「言語ダイナミクス科学研究」は、①言語多様性の記録のための研究活動(Language Description & Documentation)の活性化と、②言語運用と変化の実際、言語の多様性の実際を踏まえた、ダイナミックな現象・システムとしての言語の研究(Linguistic Dynamics Science)の新展開を目的として組織された。具体的には以下のような活動を通して関連研究を先導していく:

- ・危機言語を中心とした研究未開発言語の臨地研究の推進
- ・記述研究を支える方法論開発と共同研究インフラの整備
- ・言語運用の実際を基盤とした理論研究枠組みの再構築
- ・言語の構造的多様性の幅と深さ、およびその多様性に見られる規則性の研究
- ・言語構造の形成・変化に見られる規則性の探求とそれを形作る動機付けの多面的研究

本研究の第2フェーズ(2013-2015)では、これまでの3年間に築いた言語多様性に関する共同研究体制を維持発展させながらも、第1フェーズ(2010-2012)における研究の進展と近年の社会的要請の変化をふまえ、特に危機言語の記述とドキュメンテーション研究分野での学術成果の社会還元により力を注ぐ。

<http://lingdy.aacore.jp/>

**【アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求】**

代表者: 深澤 秀夫

本基幹研究の主たる目的は、グローバル化のなかで大きな変容を迫られているアフリカ諸地域の文化を研究する本研究所の人類学・地域研究(歴史学)研究者が、各自の研究活動に立脚しつつ、共同で多元的世界像の探求・構築を進めることである。

アフリカ文化研究の具体的なテーマとしては、たとえば、植民地経験と社会変化、遊牧民/牧畜民と農耕民、人の移動と集団間関係、社会の中の女性/シングル、などがあげられる。メンバーが個々にこのようなテーマで研究をすすめてつつ、研究班全体として、公開研究会・セミナーの開催、海外研究者との連携によるシンポジウムの開催などを行い、ウェブサイト等をつづじて研究成果の発信を行う。

以上のようなアフリカ文化の基礎研究は、紛争・難民、政治的民主化、社会的差別等、現代アフリカの抱える諸問題の理解と解決に不可欠であるばかりでなく、それらの問題の根本にある近現代世界の構造そのものを問い直し多元的な世界像を構築するのに寄与するものと期待される。

<http://aaafrika.aacore.jp/>

**【中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成】**

代表者: 黒木 英充

本基幹研究は、中東から東南アジアまでを含めたイスラーム圏において観察される人間移動と、諸宗教宗派・民族の織りなす社会関係とを連関させて、「多であること」の問題性を追究する。多元的社会の生成過程とイスラーム的ネットワーク拡張の動態、移民・難民の政治社会空間に対する影響、個人・集団のアイデンティティ戦略と政治思想の連関、などの問題に取り組む。

本基幹研究は、2005(平成17)～2009(平成21)年度「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の発展形である。ペイルート・コタキナバル両海外拠点を管轄するフィールドサイエンス研究企画センターや、MEIS「中東イスラーム研究拠点」と連携しながら、ペイルート拠点において共同利用・共同研究課題を国際的規模で推進する。また中東☆イスラーム研究/教育セミナー、ペイルート若手研究者報告会や歴史文書セミナーなどを通じて次世代研究者の育成にも当たる。さらに歴史的画像資料などの修復やデジタル化、それを使った研究成果の社会還元を積極的に行う予定である。

<http://meis2.aacore.jp/>

**【人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関】**

代表者：西井 涼子

人類学はある時期まで、小規模社会のフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、上位の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、トランスナショナルな規模にまたがる社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティヴへの関心が高まってきた。

また他方では、その対極にむかう方向性として、個人々の身体性を考察の起点とした間身体的実践、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフォーダンス、社会空間、個体形成など、マイクロ・パースペクティヴを軸とした問題系も同時に浮上しつつある。

こうした国内外の研究動向をまえに、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく調査研究をこえた次元での、新たな概念化と理論化の試みである。本基幹研究は、その点で先導的な役割をになうことを目標とする。具体的には、個人と社会、構造とエージェンシーといった二項対立の構図をこえた地点から、身体や実践の主題をめぐるマイクロ領域での研究と、広域におよぶ空間移動や生物進化のダイナミクスまで射程に入れたマクロな時間軸に基づく研究との、接合ないし理論構築にかかわる研究成果の呈示を企図するものである。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/>

**共同利用・共同研究課題**

共同利用・共同研究拠点である本研究所にとって、所員が所外の研究者と共同で推進する共同利用・共同研究課題は、もっとも大切な研究事業のひとつです。参加する所外の研究者は、AA研の「共同研究員」として委嘱されます。

各研究課題(プロジェクト)は公募を経て、所外の研究者を含む「共同研究専門委員会」によって採択されます。また年度ごとに研究成果や公開の状況などに関して評価を受けます。

これまで多くの研究課題(プロジェクト)が組織され、約650点におよぶ出版物や、オンライン辞書・データベースなど、多様な研究成果をあげています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/>

**2013(平成25)年度に進行中の研究課題**

以下のリストでは、大きく分野ごとに分けていますが、多くの研究課題が複数の分野にまたがるテーマを扱っています。

**言語学系****【アフリカ諸語の情報構造と言語形式の類型論的研究】**

2011～2013年度

代表者：稗田 乃 所員1/共同研究員12

アフリカ諸語の情報構造と言語形式の関係を探るための研究組織を形成する。アフリカ諸語の情報構造と言語形式の関係を研究する国際ネットワークの構築をめざす。同時にフンボルト大学において、プロジェクトと同様の「アフリカ諸語における情報構造と言語形式の関係について」の研究プロジェクトを、本プロジェクトと連携して申請した。近年、注目されている情報構造と言語形式のあいだに存在する関係について、アフリカ諸語の資料から研究する。共同利用・共同研究課題における研究テーマは、以下のものである。アフリカで話されている言語においても、情報構造は、ブラハ学派以来の普遍的なものであるか。アフリカ諸語が情報構造を表現するのに、どのような音韻論的、形態論的、統語論的、言語形式を用いているのか。情報構造と言語形式のあいだに存在する関係を類型論的に分析すると、なんらかの類型論的特徴が見つかるか。観察される類型論的特徴に地理的關係が存在するか。以上のような研究テーマにしたがって、研究組織を形成し、国際研究ネットワークの構築を模索する。

**【アフリカ諸語のイベントの統合のパターンに関する研究】**

2012～2014年度

代表者：河内 一博(防衛大学校) 所員1/共同研究員18

このプロジェクトは、アフリカのすべての大語族を網羅し、手話も研究対象に含め、各言語が、空間移動、状態変化、アスペクトなどの意味領域において、イベントの諸要素を統合して形態統語的に表すのにどのような特徴が見られるかという問題を扱う。ほとんどのアフリカの言語は複数の動詞からなる構文を持つが、これらの構文の形態統語的な比較も意味的な比較も体系的になされていない。世界の他の地域の言語とも比較をすることによって、アフリカの各言語・語族が全体的にどのような類型的なタイプに分類されるかを分析し、そしてアフリカの言語に特徴的な現象はあるかどうかを考える。さらに、違う意味領域間の表現パターンの一貫性が各言語・語族内で見られるかどうかを調べる。

**【準動詞に関する通言語学的研究】**

2013～2014年度

代表者：山越 康裕(札幌学院大学) 所員2/共同研究員17

本研究では、いわゆる非定形動詞、つまり準動詞にかんする以下の問題点について、東アジアの「アルタイ型」の諸言語を中心に、周辺の類型的に異なる形態統語的特徴を有する言語の事例も含めて考察する。(1) 主節述語と非主節述語が形式上区別されない、もしくはそもそも「節」の認定が難しい言語において、動詞の屈折をどう扱うか。(2) 準動詞の多機能性をどのように記述するか。(3) 動詞性の程度による準動詞と派生形式の区別は可能か。(4) 品詞分類、とくに形容詞の性質とに相関関係はあるか。これらの問題点について、フィールドワークによる一次資料に基づき諸言語のデータを分析・考察し、準動詞の多様性と通言語的特徴について一定の結論を提示することをめざす。

**【ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容】**

2013～2015年度

代表者：菅原 由美(大阪大学) 所員3/共同研究員8

これまでジャワの宗教に関する議論は「前イスラーム」的要素を強調したジャワのイスラーム受容の様相に説明の力点が置かれてきた。しかし、ジャワのテキストの歴史は9世紀にまで遡り、「前イスラーム」と一括りに説明するにはあまりに長い歴史の変遷を経ている。本研究は、ジャワ語(古ジャワ語及び現代ジャワ語)文書を通時的に比較・対照することにより、9～19世紀のジャワにおいて、外来宗教がどのように解釈され、変容してきたかを明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために、19世紀以降出版されてきたジャワ語のローマ字翻字テキストをデジタル化し、コンコーダンスを作成し、これを利用して、テキストに表れる宗教概念やその変遷に関する分析をおこなうとともに、ジャワの言語・文化の変容過程全般に関する研究の基盤を構築する。これと平行して、研究基盤を活用する国際的な研究ネットワークの形成を図るとともに、海外ですでに構築されているマレー語文献研究基盤との連携により、マレー社会における宗教の変容過程との比較を試みる。

**【複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性】**

2013～2015年度

代表者：中山 俊秀 所員4/共同研究員16

従来の言語研究においては、文法は実際の言語使用から独立した自己完結した体系をなすという前提のもと文法の分析・理論化がなされてきた。しかし、近年の研究の中で、言語使用が文法知識に影響を与えることがさまざまな角度から論証されるようになり、言語システムと言語使用を切り離すことの正当性が強く問われている。

本共同利用・共同研究課題では、局所的「例外」パターン、個人間・文脈間でのパターンのユレ、文法構造から説明できないパターン、歴史的変化に見られるパターンなど従来の文法研究で扱いにくい、実際の言語使用や変化に見られる規則性・パターンをも言語の動的な本質の一部として統合的に捉えることが出来る新たな言語記述・研究枠組みの構築を目指す。



### 【日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ】

2013～2015年度

代表者：角田 三枝(立正大学非常勤講師)

所員1/共同研究員8

日本語のノダ文については多くの研究がある。角田(2004)は「思考プロセス」という原理を提唱した。これは、話者がある現象を見た時に、「1.認識、2.疑問、3.推察、4.答え」を経て思考が展開し、「4.答え」の所でノダ文が現れるというものである。この原理を用い、単文、複文、談話におけるノダ文の機能を統一的に論じた。

本共同研究は「思考プロセス」を応用し、アジアのいくつかの言語のノダ文に相当する文の機能の解明と、新たな談話理論の構築を目指す。「ノダの思考プロセス」が他の言語にもあてはまれば、普遍的な原理と考えられる。言語によって、意味が進展するつながり方の違いなども観察し、今後の意味の進展も、予測できるかもしれない。

### 【通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造】

2013～2015年度

代表者：内海 敦子(明星大学) 所員1/共同研究員19

本研究の第一の目的は、通言語的な情報構造に関する事象および分析方法や理論のもとに、オーストロネシア諸語の情報構造を分析し、それによって他の様々な統語的事象を説明することである。これに際し、日本語や英語など、研究の進んでいる言語における情報構造の専門家を交え、分析に使用する術語およびアプローチについて全員の同意を得る。

第二に、オーストロネシア諸語の中で、情報構造が与える現象をタイプ分けする。定・不定の区別、あるいは新情報・旧情報の区別が統語的事象にどのような影響を与えるかを、各言語の担当者が分析し、報告する。

第三に、他の諸言語とオーストロネシア諸語を比較し、普遍的な点と特異な点を明らかにする。第四に、近隣の諸語との言語接触の影響が見られるかどうかを考察する。

## ■人類学系

### 【多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究】

2011～2013年度

代表者：津田 浩司(東京大学) 所員1/共同研究員9

本研究は、今日主に東・東南アジアの各地で、ある一群の人々がどのように「華人であること」を生き、またどのような広がりでもって彼らなりの「華人世界」を思い描き、新たな関係性を構築しようとしているかを、多角的に明らかにすることを目的としている。言うまでもなく「華人であること」は、それぞれの地で歴史性を帯びた文脈依存的なものであり、また近年その「華人」たちを取り巻く環境も、東南アジアをはじめとする各国での政治状況の変化、国際地政学上の中国のプレゼンスの高まり、あるいはグローバル化のさらなる進展などを受け、大きく変わりつつある。本研究ではこうした事態を踏まえ、様々な出自や背景、文化要素を身に帯びた人々が、現在どのようなことを背景に、どのような「記憶」を(再)生産し、またそれによってどのような「我々の広がり」を想像し、かつ現実に立ち上げようとしているか、そしてそれが当事者もしくは外部者によってどのような意味で「華人」であると認識されるのか、その過程を具体的事例に即しつつ多元的に明らかにする。この作業を通じ、何らかの社会事象を学術的に「華人」と一元的に表象することの意義と限界を検討する。

### 【思考様式および実践としての現代科学とローカルな諸社会との節合の在り方】

2012～2014年度

代表者：春日 直樹(一橋大学) 所員2/共同研究員15

本プロジェクトでは、科学技術に関する専門的な知識を備えた人類学者が、哲学及び自然科学の第一線の研究者と共に、具体的な事例を詳細に議論し、思考及び実践の様式という点から、ローカルなコミュニティにおける人々の生活と節合する現代の科学の在り方を考察する。それによって、1)思考様式としての科学、2)実践としての科学、3)領域化された科学、について明らかにし、推論システムとして専門化された個々の分野について特性と可能性を検討していく。

## 【地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求】

2012～2014年度

代表者：高倉 浩樹(東北大学) 所員3/共同研究員14

本企画では、「アフリカ」「中東」などの地域名を掲げた地域民族誌研究を事例としてふりかえりつつ、人文学・社会科学における民族誌的知見の位置づけを解明するとともに、人類学の可能性を探求しようとするものである。様々な地域でのフィールドの現場における民族誌的事実を理解するために必要な空間的構想力のあり方を支える方法論や視座がどのようなものかを言語化する。具体的には、各地域に特徴的な議論、研究の手法を紹介しながら地域民族誌の研究史をたどり、当該地域をどのように概念化してきたのか、そこで内包されていた前提や視座を明示する。その上で地域民族誌と地域研究における方法論の共通性と相違に着目したうえで、日本の人類学における地域民族誌の特徴を解明する。

## 【人類社会の進化史的基盤研究(3)】

2012～2014年度

代表者：河合 香吏 所員5/共同研究員19

本共同研究課題は人類社会をその進化史的基盤という視座から捉えることをめざしておこなわれてきた長期的な共同研究の第3期にあたり、霊長類学、生態人類学、社会文化人類学という3学問分野を柱として、これに倫理学の専門家を加えたメンバーで構成される。この長期共同研究はこれまでに「集団」および「制度」をテーマとしてきたが、本共同研究課題はテーマを「他者」と設定し、これまでの共同研究で明らかになったこと、すなわち、人類はさまざまな集団をなし、さまざまな制度を備えた複雑で多様な社会に生きていることに対し、そうした社会において「他者」はどのような存在として個に顕れ、対峙し、関係するのかといった側面から、人類の社会と社会性の進化に関する議論を深化、展開する。

## ■歴史学・地域研究系

## 【中国古代簡牘の横断領域的研究】

2011～2013年度

代表者：陶安 あんど 所員1/共同研究員8

簡牘とは、木や竹で作られた「ふだ」のことをいうが、それは、中国では3世紀頃まで広く用いられていた書写材料の一つであると同時に、その形態に様々な意味が込められたモノでもある。例えば現在カードにICチップが埋め込まれるのと同様に、「符・券」という簡牘には、信憑性を確保するため、記載内容に合致する特殊な刻みが施され、またパスワードのように、文書に「封検」という特殊な形状の簡牘を組み合わせ、内容漏洩を防ぐ工夫などもなされていた。

こうしたモノとしての簡牘は、複雑で長いライフサイクルを有する。作成・作成目的に沿った利用と再利用から目的外の再利用と廃棄に至るまで、簡牘は時に形状と機能を変化させ時空を移動しつつ、社会生活の様々な局面に立ち会った。そのため、簡牘には当時の豊富な情報が刻み込まれている。本研究課題は、簡牘の文字情報の正確な解読を基礎に据えつつ、中国古代の社会生活を語る証人としての簡牘に新たな生命を吹き込んで、新しい簡牘学の構築を目指すものである。

## 【東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究】

2011～2013年度

代表者：床呂 郁哉 所員5/共同研究員15

本研究の研究目的としては、まず第一に東南アジアの多文化的状況の解明を目指している。より具体的には、文化的な多様性を特徴とする東南アジアにおいて、ムスリムと非ムスリムはどのような関係性を保っているのか、また両者が相互交渉するなかで互いの文化・社会的アイデンティティをどのように構築しているのか、さらには東南アジア域内の多文化状況が政治や経済、司法、教育などの社会的・公共的領域へもつ影響や含意は何か、といった点について実証的に解明することを目指す。

### 【移民／難民のシティズンシップ—国家からの包摂と排除をめぐる制度と実践—】

2011～2013年度

代表者：錦田 愛子 所員3/共同研究員11

国民国家を構成単位とする近代以降の世界において、移民、難民の存在は、滞在国における国籍の付与、一定限度における市民権の容認、人道的見地からの人権保障などの対象として、これまで主に論じられてきた。しかし超国家レベルの政体や交渉枠組みの拡大、また越境移動の活発化は、こうした人の動きを各国単位で対処されるべき個別の派生要素と捉えるだけでは不十分であることを示している。本課題では、国民という資格と、それに付随するものと考えられてきたシティズンシップを、切り離して考えることにより、現在実際に展開している複合的な市民、居住のあり方を解き明かしていく。国籍なきシティズンシップは可能か、実際の取得事例や当該国での位置づけ、シティズンシップとナショナル・アイデンティティとの関係、移民／難民の包摂と排除をめぐるシティズンシップが及ぼす影響などについて、制度と実践、理論と政策等のさまざまな側面から明らかにしていく。

### 【近世イスラーム国家と多元的社会】

2011～2013年度

代表者：近藤 信彰 所員3/共同研究員20

16～18世紀にイスラーム圏を支配したオスマン朝、サファヴィー朝、ムガル朝という大帝国の統治体制と統治技術を前の時代および同時代の諸王朝のそれと比較しつつ、文書史料等の原史料に基づいて比較検討し、その特質を明らかにするのが、本研究課題の目的である。これらの帝国の、「柔らかな専制」などもよばれる統治体制は、多元的社会を巧みに扱い、一定の平和と繁栄をもたらした。現在、文書史料等さまざまな新史料により、これらの国家の統治体制・統治技術に関する研究は飛躍的に進みつつある。しかしながら、個人では新史料や個別研究を把握するのも困難になりつつある。最新の成果に基づきながら、共同で比較研究を行うことで、これらの国家がいかに多元的社会を統治したかを究明し、また、近代以降政治的安定をこれらの地域が失った理由を描き出す。

[http://meis2.aacore.jp/jr\\_islamic\\_states/](http://meis2.aacore.jp/jr_islamic_states/)

### 【東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触—タイ文化圏を中心として—】

2011～2013年度

代表者：クリスチャン・ダニエルズ 所員2/共同研究員20

これまでタイ文化圏の研究では、周辺のミャンマー・シヤム・ベトナムの国家(前近代・近代国家を含む)からの影響が強調されてきた。中国については、雲南省・広西省との関係のみが考慮されてきた。民族・文化・言語の研究においては、東南アジア大陸部という地域枠組のなかで検証されてきた傾向がある。タイ文化圏は北において中華世界、チベット・モンゴル世界とつながっているが、また南においてベンガル湾の海洋世界と連続している。

本研究課題では、この南北軸を中心とする広域的視点から、タイ文化圏の歴史・文化・言語を分析する。南と北に位置する民族と政権との交流・接触の中で、タイ文化圏の歴史・文化・言語がどのように形成され変容していったかを明らかにすることが主たる目的である。隣接するチベット・モンゴル及び中華の諸世界で起こった変化がタイ文化圏に対してどのような影響を与えたかを考察する。タイ文化圏を事例としながら、東アジア・東南アジア大陸における、文化圏形成のプロセスを検証する。

### 【アフリカ史叙述の方法にかんする研究】

2011～2013年度

代表者：永原 陽子(京都大学) 所員3/共同研究員9

本課題では、世界史的な視野にたった新しいアフリカ史叙述の可能性を追究する。従来のアフリカ史叙述の問題点として、無文字社会論の誤解により史料研究が疎かにされてきたこと、サハラ以南と以北(あるいはイスラーム圏)とを切り離す地域区分により大陸全体の歴史的特性をとらえる視点が弱かったこと、植民地化以前の中東／西アジア・インド洋世界、大西洋世界、ヨーロッパ等との歴史的関係が十分にとらえられずにきたこと、植民地時代を基準とした時代区分が行われてきたこと、それらのいずれの問題系においてもジェンダーの視点が軽視されてきたこと、などを挙げるができる。本課題では、これら諸点について検討を加え、文字史料・非文字史料双方を踏まえてアフリカ史像を構築し、アフリカ史と世界史とを有機的に結びつけて理解するために必要な視点と方法を提示することを目指す。

**【現代アフリカにおける〈国家的なもの〉に関する研究：ニューメディア・グローバリゼーション・民主主義】**

2012～2014年度

代表者：内藤 直樹(徳島大学) 所員2/共同研究員17

本課題は、現代アフリカとその周辺地域における国家の再編にかかわる諸問題を検討することを通じて、グローバリゼーションのなかで展開する新たな国家や市民社会の可能性について構想する。そのために次の3つの領域におけるアクター間の交渉や葛藤に関する民族誌を比較検討する。①携帯電話やインターネットなどのニューメディアの導入・利用・普及、②移民・難民による経済活動およびイスラム金融や中国経済の台頭といった国家や地域を越えたグローバルな経済活動、③国際社会や国際NGOが深く関与する民主化運動や先住民運動。本共同研究は、これら現代アフリカの国家再編にかかわる民族誌を比較検討することで、アフリカという一地域で育まれてきた社会や文化に根ざした新たな地域像の可能性を提出するとともに、国民国家という枠組の再編過程を総合的に解明する方途を探求する。

**【前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討】**

2012～2014年度

代表者：太田 信宏 所員3/共同研究員19

本課題は、イギリス植民地支配期以前の南アジアにおいて、さまざまな中間的社会集団がそれぞれの政治、経済、社会的文脈のなかでどのように発展し、いかなる役割を担っていたのかを検討する。前近代南アジアでは「カースト」や村落、村落連合(「地域共同体」、都市、商人仲間、教団・宗派などが一定の自律性・自立性をもって存在していた。これら諸集団間の闘争と折衝の過程、さらには諸集団と支配権力とのそれに着目して、南アジアの歴史的展開を捉え直す。本課題では、固い枠組みをもつとされる社会集団(「カースト」など)だけではなく、雑多な諸集団を取り上げ、それらを支えた内的結合の多様なあり方を、集団間の比較も行いつつ明らかにする。

**【イスラームに基づく経済活動・行為】**

2013～2015年度

代表者：福島 康博 所員2/共同研究員10

本研究課題は、イスラーム金融やハラール産業、ムスリム女性のファッション、巡礼やイスラーム・ツーリズムなど、イスラームに基づく産業における経済活動、および六信五行の実践やシャリーアに則った生産・分配・消費というムスリムの経済行為に注目し、複数のディシプリンから多角的な分析を通じて、これらの現象の現代的な意味と意義を明らかにすることを目的とする。研究対象地域としては、中東・北アフリカ、東南アジア、南アジア、中央アジアなどである。人類学、地域研究、経済学などのディシプリンをもった研究員が、共同研究を通じて、各地で観察されるイスラームに関連する経済活動・行為の実態の解明を行っていく。

**【歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化(2)】**

2013～2015年度

代表者：石川 博樹 所員2/共同研究員15

サハラ以南アフリカ諸国の経済停滞が国際的な懸案となっている現在、大多数の国々の基幹産業である農業についての研究を一層深化させることが国際的に求められている。これまで我が国におけるサハラ以南アフリカ農業研究は、主に農学、人類学、経済学の研究者によって実施され多くの成果をあげてきた。本研究課題においては、これらの学問分野の研究者に歴史学研究者も加わり、サハラ以南アフリカ諸地域の農業と文化の関連について歴史的観点からの研究を共同で実施する。特に社会的・文化的に重要な役割を果たしてきたにもかかわらず未解明の課題が少なくない主食用作物に関わる史的諸問題を広範に検討することによって、サハラ以南アフリカ農業研究の新たな研究領域の開拓を試みる。

**【中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存  
(第2期)】**

2013～2015年度

代表者: 黒木 英充 所員4/共同研究員14

本研究は2010-2012年度に実施した同名の課題の第2期研究で、中東の6都市(バイルート、アレppo、エルサレム、カイロ、イスタンブル、テヘラン)における人間移動の実相と都市空間の拡大・変容を分析し、多民族・多宗派関係がどのように形成されてきたか、そしてそれが近現代の政治・社会運動にどのような影響を与えてきたかを明らかにすることを目指す。第2期は多層ベースマップシステムを使って、都市とその後背地ならびにより広域の関連地域を対象とした時間軸も考慮した多層空間に、移動とエスニシティを位置づけることを目標とする。研究会はバイルートの中東研究日本センターとAA研とで交互に行うことを予定している。



ネットワークの構築

海外学術調査総括班



海外学術調査総括班(The Overseas Scientific Research Coordination Team: OSC)は、AA研所員が培ってきた人文社会系フィールドワークの諸経験をふまえて、フィールドサイエンスの構築可能性の探究と超域的研究ネットワークの確立をめざす事業です。

1975(昭和50)年以来、人文社会系・理工系・医学系・農学系・生命科学系など、さまざまな分野で海外学術調査にたずさわる研究者・研究組織間、そして、研究者・研究組織と文部科学省や日本学術振興会との間の情報交換や連絡調整に従事してきました。2005(平成17)年度からは、事務局をAA研フィールドサイエンス研究企画センター内に置き、活動内容のさらなる拡充につとめています。

本事業の主な活動は次の2つです。

1. 海外学術調査の研究組織の代表者を中心に、広く全国の研究者を集めた「海外学術調査フォーラム」の開催
2. フィールドサイエンスの構築可能性をさぐる多彩な企画の継続的な開催・運営

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~gisr/>

Fieldnet



Fieldnetは、フィールドワークを行う研究者が文系/理系、また専門分野や所属の壁を越えて参加し、個々のフィールドや研究上の情報などを提供し合うことで、個別的な<知>を結び、それにより新たな<知>を構築するためのネットワークです。オンラインで得た学術的つながりを、オフラインのワークショップやラウンジという機会を通じて、更に発展させていきます。異分野から得られた知的刺激を、個人研究へとフィードバックさせ、さらには新たな学際的共同研究の創生に活用し、フィールドサイエンスの可能性に挑むことを目指しています。

<http://fieldnet.aacore.jp/>

Fieldling

Fieldling フィールド言語学コミュニティ

AA研は、「フィールドリング(Fieldling)」という若手記述言語研究者のコミュニティを支えています。このコミュニティは所属研究室の枠を越えた交流・協力を促進する目的で2005(平成17)年にAA研を拠点として活動を開始しました。

フィールド言語学の様々な分野に関して、フィールドリングのメンバーから寄せられる意見・要望に応える形で幅広い内容にわたって研究支援企画を実施しています。このように、FieldlingはAA研が若手研究者コミュニティにおけるニーズによりよく応えるための仕組みとして機能しています。

主な活動には、

1. 各メンバーが研究対象の言語データを持ち寄り、具体的なトピックに絞って議論する研究会
2. 分析のスキルアップを目的としたワークショップ
3. 現地調査で得た資料や研究成果の刊行
4. フィールドワーカー同士が情報・知識を交換できる記述言語研究コミュニティ・ウェブサイトの構築と運営
5. 言語の記述的研究について広く理解してもらうための一般向けウェブサイトの運営、などがあります。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/fieldling/>



## 大型プロジェクト



### 「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」

#### (言語ダイナミクス科学研究プロジェクト2：LingDy2)

この事業は、近年その重大さが急激に増している危機言語問題および言語の多様性の究明に関して、これまで国際的に展開されてきた学術的研究連携活動を集約し、さらにその学術研究成果を社会的に応用・還元していく統合的研究拠点を構築することを目的として、文部科学省特別経費を受け2013(平成25)年度から5カ年計画で行っているものです。平成20～24年度にわたって活動し国内外よりその成果が高く評価されたプロジェクト「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」を基盤として、イギリスのロンドン大学東洋・アフリカ研究学院(SOAS)、及びドイツのマックス・プランク進化人類学研究所(MPI-EVA)との連携のもと、国際研究ネットワークを新たなレベルに進化させていきます。

言語の生成・変化・消滅という動態と言語間に見られる多様性に関する高度な学術研究を推進する一方で、その成果を危機言語コミュニティを中心とした国際社会での問題解決・ニーズ対応に応用・還元する研究を先導できる統合的研究拠点到機能を高めていきます。また、この拠点機能を、本事業期間を越えて長期的に持続させるために、国際コンソーシアム及び研究連携プラットフォームを基盤とした研究連携・相互支援体制を構築すると共に、積極的な次世代育成(共同研究リーダー育成や大学をこえたトレーニングの提供などにより将来につながる研究コミュニティを形成)を行っていきます。

具体的には以下のような研究事業活動で構成されています：

- I. 危機言語・言語多様性に関する2つのネットワークの確立
  - a) 学術的ネットワークの拡充
    - ・危機言語の調査研究の推進と成果のデジタル化・資源化
    - ・言語多様性の類型と差異の深さに関する研究・データベース構築
  - b) 研究還元ネットワークの構築
    - ・学術研究の応用・還元に関する手法研究と普及
    - ・危機言語コミュニティとの共同研究・アウトリーチ・問題解決能力育成活動
- II. ネットワークの基盤となるインフラの整備
  - ・研究の有機的連携・融合を支えるオンライン共同研究プラットフォームの構築
  - ・言語調査データのアーカイブ・資源共有体制構築
  - ・研究資源の共同利用と研究連携に関する新しい手法の研究と普及
- III. ネットワークを継承する次世代研究者の育成
  - ・大学の枠をこえた若手研究者トレーニング環境の提供および研究コミュニティの育成
  - ・共同研究の先導・企画運営の実践的経験を積むための雇用機会の提供



## 既形成拠点

## アジア書字コーパス拠点(GICAS)



GICAS「アジア書字コーパス拠点」は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究(COE)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts)によって2001(平成13)～2005(平成17)年度の5年度にわたり補助金を得て形成されてきた「COE研究拠点」の1つです。

GICAS拠点が体系化を目指す「文字情報学」は、アジアにおいてとりわけ豊饒な「文字」を情報通信の基盤メディアとして捉え直し、ここに国際的な文字情報通信で求められる学問的基礎を与えることを目的とする新しい学問領域です。

GICASは、研究所の従来の研究活動をいっそう拡充して、統計的解析を行うに十分な規模の資料体(コーパス)としてアジア各地に蓄積される書字文化資料の「アジア書字コーパス」を構築してきました。各地に伝存する碑文・石経、諸宗教聖典の宮廷写本など、本文・字体の双方に規範を示すために作成された聖典書字資料はアジア各地に残存しますが、この電子化を中心とした「アジア書字コーパス」(Corpora of Asian Scripts)は、そこに投影されるアジアでの文字学問研究の伝統と文字使用文化の歴史の電子的な体现であり、「アジア書字コーパス」を現代の情報処理技術で実装することで、検証可能性を持つ新たな学問領域「文字情報学」の創成と体系化の基盤とすることができます。

「アジア書字コーパス」の実装は、文字情報処理に確固たる学問的基盤を与えることを意味し、これによって「アジア書字コーパス」に文字情報学の国際的レファレンス・センターとしての国際的な認知を得て、アジアの文化に根差した文字学問研究・文字情報処理においても、我が国が主導的な立場に立つことを目指すものです。

<http://www.gicas.jp/>

## 中東イスラーム研究拠点(MEIS)



MEIS「中東イスラーム研究拠点」は、本研究所が2005(平成17)年度から2009(平成21)年度まで文部科学省特別教育研究経費(拠点形成)を得て実施した「中東イスラーム研究教育プロジェクト」(The Research and Educational Project for Middle East and Islamic Studies)を通じて形成された中東およびイスラームの研究拠点です。

この拠点の前身となった中東イスラーム研究教育プロジェクトは、2006(平成18)年2月にレバノンのバイルート拠点「中東研究日本センター(JaCMES)」、2008(平成20)年3月にはマレーシアのコタキナバル拠点「コタキナバル・リエゾンオフィス」を開設し、それぞれの運営にあたる一方、中東・イスラームに関する複数の共同研究を展開し、国内外の研究者を招いた不定期の研究会やシンポジウムと合わせて、日本における中東研究、イスラーム研究の全国的な発展や国際的展開に寄与してきました。

また、全国の大学院生や博士課程満期修了者を対象とした中東・イスラーム研究セミナー、同教育セミナーおよびアラビア語、ペルシア語、ジャワ語の文献学・文書学セミナー、さらには若手のみならず全国の研究者すべてを対象としたオスマン文書セミナーなどを通して、次世代を担う若手研究者の育成にも努力してきました。

2010(平成22)年4月に発足した本研究拠点は、同時にスタートした基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」や、中東研究日本センター、コタキナバル・リエゾンオフィスの維持・運営にあたるフィールドサイエンス研究企画センターと密接に連携・協力しながら、わが国の中東研究、イスラーム研究のさらなる振興・発展を目指しています。



アジア各地で撮影した調査写真のプリント 撮影:澤田英夫



知の拡大を支える  
資料と情報のベース

# 研究資源



アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源

IRC プロジェクト

「アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発・国際学術交流の推進」というIRC(情報資源利用研究センター)の設置目的に合致した研究を本研究所内で毎年度募集し、審査を経て「IRCプロジェクト」として採択しています。

<http://irc.aa.tufs.ac.jp/projects/>

オンライン研究資源

AA研の共同研究や、スタッフ個人の研究の成果として、デジタル化された辞書・データベースなどのコンテンツをオンラインで公開しています。これは、AA研が国内外の研究者向けに研究資料や成果を公開することを目的としているものです。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/on-line/>

資料展示(企画展・オンライン展示等)

AA研スタッフが収集したアジア・アフリカの言語と文化に関する貴重な資料や、それらの資料をもとに行われた研究の成果を広く一般に公開するために企画展を実施しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/event/exhibitions/>

出版物



出版物

本研究所では、査読付きの学術誌、共同研究および個人研究を通じたさまざまな研究成果、そして、言語研修や辞典編纂などの事業の成果を数多く出版して公開しています。研究機関あるいは研究者の方々には多くのものを無償で頒布しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/>

『アジア・アフリカ言語文化研究』 *Journal of Asian and African Studies* (年2回発行) : 国内外で高い評価を得ているAA研発行の国際学術雑誌です。所外の研究者を含む編集専門委員会(p.6)が編集に携わり、国内および海外から投稿され査読を経た、言語学・歴史学・文化人類学に関する高水準の論文を掲載しています。

『アジア・アフリカの言語と言語学』 *Asian and African Languages and Linguistics* (年1回発行) : アジア・アフリカ諸言語の記述研究の成果を発信するために2006(平成18)

年に創刊された査読付き学術雑誌です。一次データに基盤を置いた研究成果の共有により言語の構造的多様性を明らかにし、その記述と理論両面に貢献することを目的としています。

「アジア・アフリカ言語文化叢書」: AA研を代表する成果シリーズです。所内外の研究者によるアジア・アフリカの言語文化についての論考を査読を経て出版しています。

「地域・文化研究」: AA研が主催する共同研究の研究報告が中心となっています。

「言語研修テキスト」: AA研で毎年行われる言語研修で用いるために、担当講師が独自に作成したテキストです。

「アジア・アフリカ基礎語彙集」: 基礎的な語彙集から辞書まで、多岐にわたるフィールド語彙調査の成果を査読を経て出版しています。

『フィールドプラス』(年2回発行) : 2009(平成21)年に創刊された雑誌です。AA研スタッフ・共同研究員を始め、人文科学以外の研究者も執筆陣に迎え、世界のあらゆる場所をフィールド(調査地)とする研究者たちの新しい発想・取り組みやその過程で得られた経験を、様々な角度から紹介します。



### 海外研究拠点

本研究所は、海外の研究者との連携と交流をより活発におこない、国際的な共同研究を展開していくために、ベイルート(レバノン)とコタキナバル(マレーシア)の2箇所に海外研究拠点を設置しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/satellite/>

#### 中東研究日本センター (JaCMES)



中東研究日本センターは、AA研がレバノンの首都ベイルートに設置した初の海外研究拠点です。2005(平成17)年12月15日にレバノン政府閣議決定による認可を受けて、2006(平成18)年2月1日に開所式を行いました。

本センターは、AA研の共同利用・共同研究拠点としての機能を海外において展開すべく、次のような活動を行います。

##### 1. 国際共同研究の推進

共同利用・共同研究課題を海外の研究者とともにJaCMESで直接実施します。また、常駐の特任研究員を派遣して、長期の現地調査に専念させています。

##### 2. 若手研究者報告会「日本の中東・イスラーム研究の最前線」

日本の博士課程大学院生や学位取得後の若手研究者が最新の研究報告を行い、レバノンを始めとする中東現地の研究者と直接交流する機会を提供します。

##### 3. 日本・中東関係講演会

日本と中東の関係、日本におけるイスラームの歴史などを専門とする研究者を講演のために派遣し、交流の歴史と現状を紹介する機会を設けます。

##### 4. ベイルートとレバノン情勢学術情報の紹介

ベイルートを中心とするレバノンの活発な学術・文化的活動の情報を収集し、レバノンとその周辺地域の激動する情勢を週単位で追跡し、ウェブサイトで公開して紹介しています。

#### 所在地:

Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES)  
2nd Floor, Azarieh Building, A2-1, Bashura, Emir  
Bashir Street, Beirut Central District, LEBANON  
Phone/Fax: +961-1-975851

#### コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)

コタキナバル・リエゾンオフィスは、マレーシア・サバ州政府により設立されたサバ開発研究所(Institute for Development Studies, Sabah)の全面的な協力により、AA研の東南アジアにおける政治・社会・文化に関する総合的学術研究拠点として、2008(平成20)年3月1日、同研究所内に設置されました。サバ州は、ブルネイ、インドネシア、フィリピンなどの東ASEAN成長地域、南シナ海及びインド洋の交差点にあたり、多様な文化の交流の場となっています。アジア海域世界の動態の解明にとって最適な地の利を活かし、マレーシア、日本および関連諸国の研究者とともに多様な国際的共同研究プログラムを推進します。

#### 所在地:

Kota Kinabaru Liaison Office, ILCAA-TUFS  
Institute for Development Studies (IDS), c/o, IDS Lot  
2-5, Wisma Setia, Off Jalan Pintas, Pinampang, Kota  
Kinabalu, Sabah, MALAYSIA  
Phone: +60-88-246116, 246167, 242871  
Fax: +60-88-234707



### 音声学実験室

本研究所の音声学実験室は、言語音の基礎研究に関する分析や実験を行うために必要不可欠な設備を備えています。コンピュータスピーチラボ(CSL4500)は、アナログ音声信号を高品質でコンピュータに取り込み、スペクトログラム・フォルマント軌跡・LPC(線形予測符号化)周波数反応・FFT(高速フーリエ変換)パワースペクトル・LTA(長期平均)パワースペクトル・ケプストラム分析・ピッチ曲線分析・エネルギー曲線分析など、さまざまなタイプの分析を行うことができます。波形編集・チャンネル編集・時間編集・振幅編集などの基本的編集機能や、記録・再生機能も有しています。さらに、リアルタイムなスペクトログラム分析・ピッチ分析を行うための専用ソフトウェアも利用可能です。この機器は、言語学的観点から見た発話音の

様々な側面の分析を行うのに適切なものです。

音声学実験室に備えられた音声・言語ライブラリには、所員をはじめとする研究者がフィールド調査を通じて収集した言語音・民話・民族音楽など貴重な録音資料が保管されています。これらフィールド調査の成果である録音ディスク・テープの一部および世界諸言語の録音ディスク・テープは借り出すことができます。実験室にある分析機器・録音機器・メディア変換用機器などのハードウェアとソフトウェアには使用説明書が備えられ、利用者の便を図っています。

音声学実験室内には、防音スタジオが用意されています。スタジオに備えつけられた高性能のソリッドステートデジタル録音機を使用して、話者の発話サンプルの高品位な録音を行い、実験室の機器を用いてそれを分析することができます。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/phonetic-lab/>

### 文献資料コレクション



### 文献資料コレクション

本研究所は、1964(昭和39)年の創設以来、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究にとって重要資料を収集してきました。現在、資料総数は、図書約14万冊、雑誌約1,800タイトル、マイクロフィルム約1万リール、マイクロフィッシュ6万シートに達し、ほかに古文書、地図、写真、ビデオや、CD-ROM等も所蔵しています。

AA研のみがもつ貴重な資料も少なくありません。たとえば、カンボジア語版南伝大蔵経は、戦乱により現地では散逸しましたが、本研究所所蔵本をもとに複製版がつくられ、カンボジアの文化教育機関や寺院に寄贈されて、彼の地の文化復興に貢献しました。また、浅井恵倫旧蔵資料(台湾先住民関係の土地契約文書、動画、写真、語彙集、用例集、フィールドノート等)は、研究所ウェブサイトで公開されています。

このほかにも、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン『エジブ

ト誌』(第2版)、19世紀「カイロ石版画集」コレクション、19世紀末からのイランの主要新聞65種、19世紀末に創刊されたベンガル語文芸雑誌のバックナンバー、中国清代の製糖法を伝える画集、清代台湾民俗図、清代モンゴル語仏典、ロシア帝国で出版されたモンゴル語聖書、満洲国駐タイ公使館文書、日本の植民地官僚で京城帝国大学総長も務めた篠田治策の文書など、貴重な資料が所蔵されています。三浦周行旧蔵品を含む朝鮮王朝古文書類コレクションや、清代公文書コレクションは、現在も継続して収集を続けています。

アジア・アフリカ研究における先覚者の個人文庫としては、山本謙吾(満洲語研究)、小林高四郎(モンゴル史研究)、前嶋信次(イスラーム研究)、王育徳(台湾語・文化研究)諸氏の蔵書があります。

なお、故大塚和夫氏の人類学と中東・イスラーム関係の蔵書も大塚文庫としてすでに一部が公開されています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/library/>

インドネシア、ロンボク島、マタラム:アイスクリーム売りのおじさんと学童 撮影:塩原朝子



知識と経験の  
終わらなきリレーのために

## 研究者養成



研究者養成のための事業

本研究所ではアジア・アフリカを中心とする研究活動を新しく展開させ、後世に引き継ぐ次世代研究者を養成するために、3つの側面から機会を提供しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/>

【学ぶ・身につける】

～言語運用能力の習得、研究スキルの習得

特定の言語の短期集中型習得や、地域やトピックを絞り込み深く掘り下げた講義・討論をする機会を提供する企画を展開しています。

【磨く・鍛える】

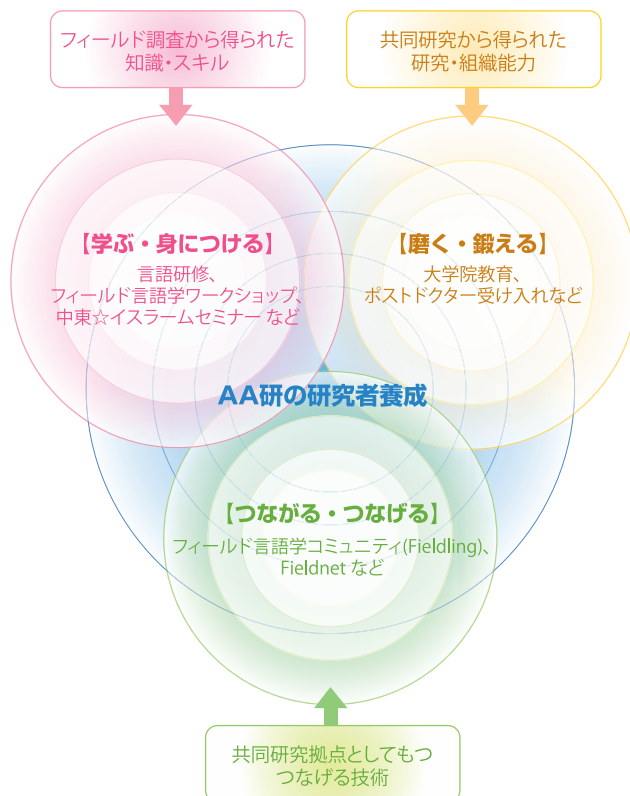
～研究を実践的に展開する能力の鍛錬、共同研究を組織する能力の鍛錬

大学システムの中にあつて、従来型の大学院教育を超えた個別研究・共同研究の実践的トレーニングを積むための指導、機会を提供しています。

【つながる・つなげる】

～研究者、研究活動を有機的につなげる仕組み・インフラの整備・提供

狭い専門分野や所属学科などの枠を越えて若手研究者をつなぎ、アジア・アフリカに関する共同研究を将来に向けて活性化し、研究の新展開の可能性を広げるための研究者コミュニティ作りの活動をしています。





### 言語研修

本研究所では毎年夏、専門研究者と母語話者を講師陣に迎え、アジア・アフリカ地域の研究を志す初学者を対象とした短期集中プログラムによる言語研修を実施しています。言語研修に参加することで、現地調査や文献研究を行うために必要な言語知識や調査の手法など、専門的知識も学ぶことができます。研修言語は、おもにアジア・アフリカ地域で話される少数民族の言語を含めた様々な言語を取り上げています。毎年、東京会場で2言語、大阪会場で1言語の研修を実施しています。

これまでに実施された言語の数は、のべ123言語、修了者数のべ1,160名にのぼっています。修了者の中からは、大学や研究機関の職につき、アジア・アフリカ地域の専門家としての道を歩んでいく方々が輩出しています。

実施にあたっては、語学教育に造詣の深いAA研内外の専門委員と担当講師および所員がプロジェクトチームを組み、実

施方法や評価についての議論を行い、効果的な研修を目指しています。すべての研修において講師陣が独自に教材を開発していることも、AA研の言語研修の大きな特徴のひとつです。

大阪会場で実施されるものは、大阪大学大学院言語文化研究科の協力を得て行われます。研修生は、大学などの研究機関を通じて全国から公募します。研修を修了した人には審査のうえ、修了証書が授与されます。

2006(平成18)年度より東京外国語大学の学部および大学院の開講科目となりました。

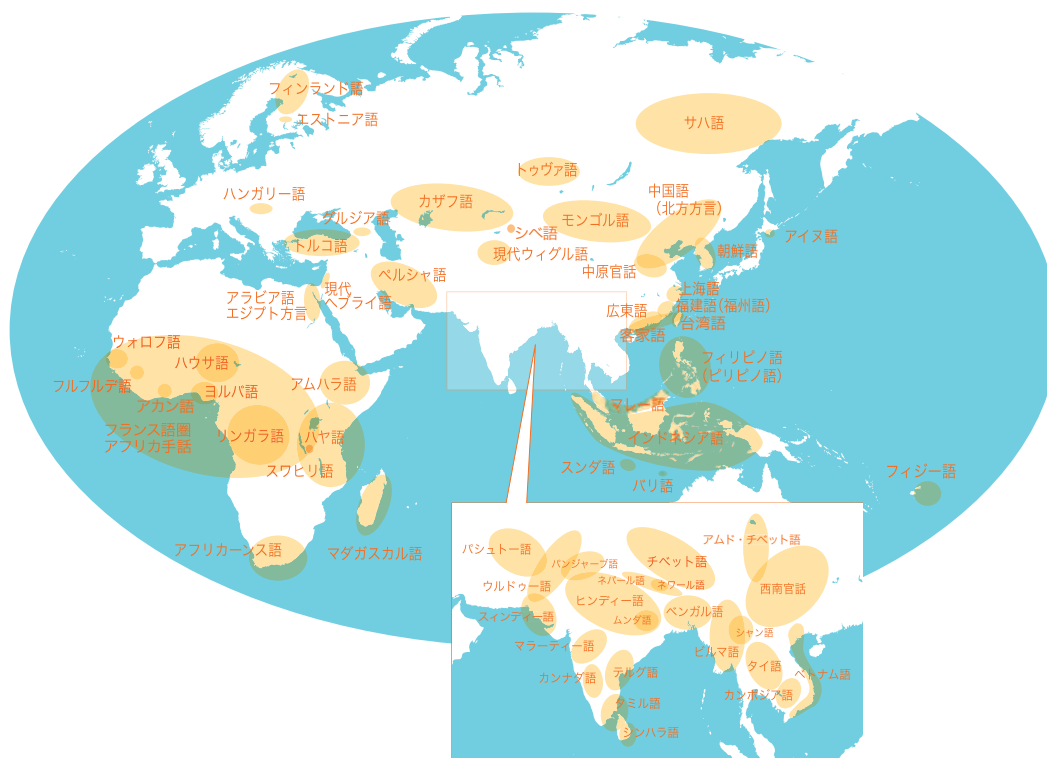
2012(平成24)年度は、台湾語、ビルマ語中級(東京会場)、ベトナム語中級(大阪会場)の講座を開講しました。

2013(平成25)年度は、ハウサ語、アルメニア語(東)(東京会場)、ウズベク語(大阪会場)の講座を開講予定です。

現在、これまでに作成されてきた教材のウェブ上での公開も進めており、完成したものから順次公開しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/>

ことばを教える





フィールド言語学ワークショップ

AA研では、研究者養成のための研修事業の一環として、特に大学院生・ポストドクターなどの若手研究者に向けたフィールド言語学に関する様々なワークショップを行っています。

これらのワークショップは、特に研究の進んでいない言語のドキュメンテーションと記述に関するもので、日本の大学では通常、授業として行われていないものです。そのような研究者養成の一端を担うことは、AA研の重要な役割のひとつでもあります。

ほとんどのフィールド言語学ワークショップでは、参加者がそれぞれ自分がフィールド調査を通して得た言語データを持参することが求められます。ワークショップの講師が助言するばかりではなく、参加者同士が互いの経験を共有することによって、知見を広め深める場となっています。

フィールド言語学ワークショップには、大きく分けて以下の3つのシリーズがあります。

Documentary Linguistics Workshop

ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院(SOAS)のHans Rausing Endangered Languages Projectと連携して2008(平成20)年から行われている約1週間の短期集中ワークショップです。

言語ドキュメンテーション分野を代表する研究者を講師に迎え、日本の記述言語学分野の若手研究者に言語ドキュメンテーションの理論と実践をレクチャーします。また、レクチャーで得た知識への理解をより深めるため、少人数のグループに分かれてアーカイブの疑似体験や言語学習教材の企画・作成などをテーマとしたプレゼンテーションを行うグループワークの機会も設けています。

文法研究ワークショップ

フィールド調査で得られる生の言語データに基づいた文法現象の分析、文法の記述、通言語的な比較・対照を行う上での諸問題に焦点を当てて企画されるワークショップです。

地域的・構造的に多様な言語を实地に調査する研究者が集まり、大学や地域の枠を越えた交流の機会を提供しています。

テクニカル・ワークショップ

フィールド調査で得られた言語データの管理・整備・加工・変換に必要な基本的技術の習得を目指すワークショップです。

これまで、パソコンによるデータ処理の基礎知識や、フィールド言語学者がよく使うToolbox, ELAN, Praatなどのソフトウェアの使い方を扱ってきました。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/fieldling-ws/>





### 中東・イスラーム関連セミナー

中東もしくはイスラーム世界に知的・学問的関心を持ち、調査・研究を進めている大学院生や若手研究者を対象に、この研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、問題意識にあふれた研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションの能力を高めることを目的としています。

#### 中東☆イスラーム研究セミナー、中東☆イスラーム教育セミナー

本セミナーは、2005(平成17)年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進している研修事業です。「教育セミナー」は、大学院生を対象に、AA研スタッフと招へい講師による講義、受講生のうち希望者による研究発表から構成されています。中東やイスラームについて専攻する大学院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームを専攻としない院生も受け入れ、基礎的な知識や研究手法の情報提供、受講者の間の討論を通じた交流の場を作っています。

「研究セミナー」は、それよりも高度なレベルの研究者、すなわち大学院博士課程後期(博士課程)および博士論文の準備をしている方々を対象にしています。講義は行わず、長時間の研究発表と徹底した討論の機会を提供します。博士論文構想のヒントを得たり、異なる研究分野・地域の研究者との意見交換から知識を拡充したりすることが期待されます。例年、「教育セミナー」は9月に、「研究セミナー」は12月に開催されます。

なお本事業は、2006(平成18)年度から、東京外国語大学大学院、および同大学院と単位互換協定を結んでいる大学院に所属している院生には、単位履修申請科目となっています。

[http://meis2.aacore.jp/meis\\_research\\_seminar/](http://meis2.aacore.jp/meis_research_seminar/)  
[http://meis2.aacore.jp/meis\\_educational\\_seminar/](http://meis2.aacore.jp/meis_educational_seminar/)

#### オスマン文書セミナー

オスマン朝の文書・帳簿を古文書学・アーカイブズ学的視点から学ぶ演習形式のセミナーです。人間文化研究機構(NIHU)プログラム・イスラーム地域研究東洋文庫拠点との共催で、年に1回、2日間にわたって開催しています。

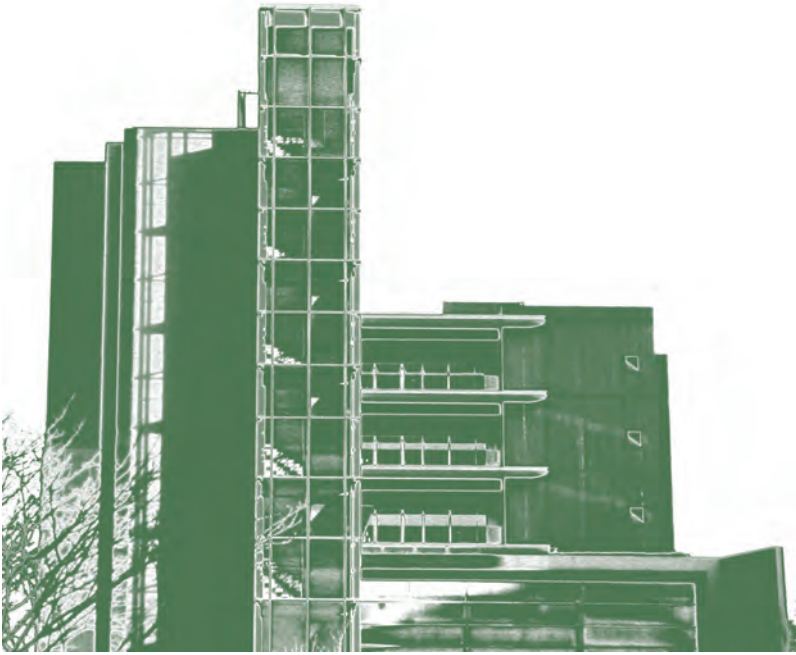
<http://meis2.aacore.jp/ottoman/>

#### ベイルート若手研究者報告会

中東☆イスラーム研究セミナー、教育セミナーと同じく、2005(平成17)年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進している事業です。国籍を問わず、日本において中東に関連する人文・社会科学研究(地域研究・歴史学・人類学・イスラーム学など)を専攻している若手研究者の最新の研究成果を、レバノンをはじめとする中東の研究者たちに広く知っていただくとともに、専門家同士の密度の濃い議論の場を提供することを目的としています。

公募によって選考され、中東現地に派遣される若手研究者は、英語による25分間の研究報告を行い、その後20分間、開催地や近隣の中東諸国あるいは欧米から招聘したコメンテータを含む参加者との間で質疑応答を行います。本報告会は、2006(平成18)年度はイスタンブールのボアジチ大学、2007(平成19)年度はベイルートのクラウン・プラザ・ホテルで開催しましたが、2008(平成20)年度からはベイルートにおける研究拠点「中東研究日本センター」を会場とし、「日本における中東・イスラーム研究の最前線」Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: the State of the Artというタイトルのもと、11月に開催しています。

[http://meis2.aacore.jp/meis\\_research\\_seminar/beirut-semi/](http://meis2.aacore.jp/meis_research_seminar/beirut-semi/)



■ロゴマークについて…ラテンアルファベットのAを二つ並べたように見えますが、実はこれはブラーフミー文字の第1字とフェニキア文字の第1字を組み合わせたものです。

2004年度より、「東京外国語大学」は、「国立大学法人」として新しく生まれ変わりました。これにとまない、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所では、「アジア・アフリカ言語文化研究所」の名称ならびに本研究の略称である「AA研」と上のロゴマークの商標登録査定を特許庁に申請し、平成17年8月19日付で商標登録証が発行されました。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

TEL 042-330-5600 FAX 042-330-5610

MAIL ilcaa@aa.tufs.ac.jp

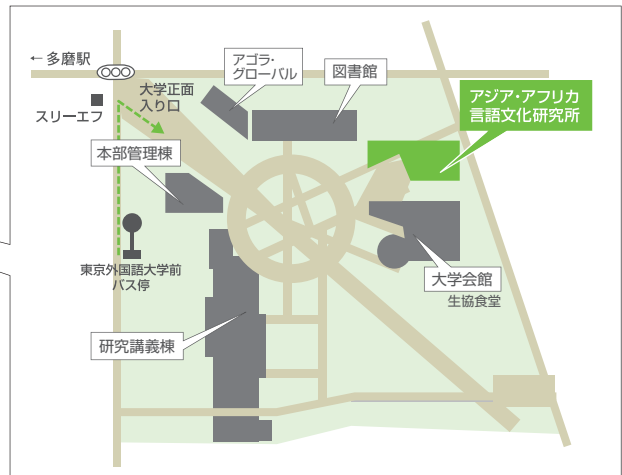
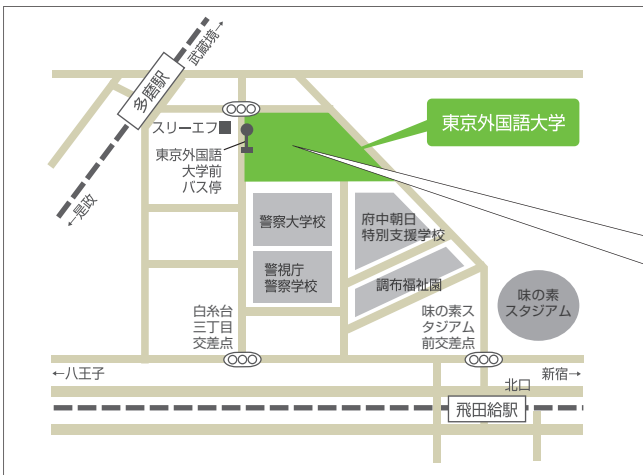
URL <http://www.aa.tufs.ac.jp/>

Research Institute for Languages  
and Cultures of Asia and Africa,  
Tokyo University of Foreign Studies,  
3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, JAPAN  
phone +81-(0)42-330-5600, fax +81-(0)42-330-5610

## AA研へのアクセス



- JR中央線「武蔵境駅」から西武多摩川線に乗り「多磨駅」で下車(所要5分)。駅から徒歩5分。 ※西武多摩川線は12分間隔。
- JR中央線「三鷹駅」から小田急バス鷹52系統に乗り「東京外国語大学前」で下車(所要30分)。停留所から徒歩2分。  
※小田急バス時刻表:  
<http://www.odakyubus.co.jp/cgi-bin/search/mapsearch.cgi>
- 京王線「飛田給駅」から京王バス飛02系統・調33系統(いずれも多磨駅行き)に乗り「東京外国語大学前」で下車(所要7分)。停留所から徒歩2分。
- 京王線「調布駅」から京王バス調33系統(多磨駅行き)に乗り「東京外国語大学前」で下車(所要20分)。停留所から徒歩2分。  
※京王バス時刻表:<http://www.bus-navi.com/>



## ■土曜日の朝、イスラームの勉強に行く少女たち

仏教徒が人口の95%を占めるタイにあって、南タイのマレーシア国境付近の4県だけはムスリムがマジョリティである。このうちパタニ県を含む東海岸の3つの県では、2004年1月から道路や建物に爆弾がしかけられたり、放火、殺人といった暴力事件が頻発している。そんな中でも人々は仕事に行き、モスクへ礼拝に出かける。

月曜日から金曜日まで公立の小学校に通う子供たちも、土曜日と日曜日は近所にイスラームの勉強に行く。この土曜日にも友人の子供たちは、いつものように叔母のバイクに3人乗りで出かけた。しかし、イスラーム私塾の正面で人が殺され、その現場検証で警察が道を封鎖したため、勉強は中止となりすぐに帰宅してきた。

撮影場所：南タイ東海岸のパタニ県

撮影者：西井涼子

撮影日：2009年3月7日